



産炭地研究会  
JAFCOF Japan Association for Study of Former COalFields

JAFCOF 釧路研究会  
リサーチ・ペーパー vol.7

## 尺別炭砒の閉山と子どもたち

—元尺別炭砒中学校教頭 松実寛氏による講演の記録—

編集：

嶋崎 尚子 早稲田大学文学学術院

nshim@waseda.jp

笠原 良太 早稲田大学大学院文学研究科

kasahara\_2369\_bz@ruri.waseda.jp

2016年1月15日



目次

はじめに	1
松実寛氏講演「尺別炭砦の閉山と子どもたち」	
1.閉山の実態	3
閉山後の集落の動き	
尺別集落について	
集落の急激な崩壊	
2.閉山と尺中の教育	9
(1) 閉山が生徒・教員に何をもたらしたのか	
生徒たちにとっての「閉山」	
閉山が生徒と学校にもたらした第1のもの	
閉山が生徒と学校にもたらした第2のもの	
閉山による良い影響：少人数授業	
閉校直前の教室の様子	
教員の途中転出、清掃範囲の拡大	
(2) 私たち教員はどう対応したか	18
淋しくもあり 楽しくもあつた 修学旅行	
学校給食	
教育条件整備、備品整理	
新しい校門をつくる	
(3) 閉山・閉校を振り返って	23
教育行政との関係	
尺別の悲劇的状況の2つの要因	
転出後の生徒たち、手紙のやり取り	
この試練に何か意義があつたとするなら	
質疑応答	28
当日配布レジュメ	34
参加学生の感想	36
解題（嶋崎尚子）	41



## はじめに

本釧路リサーチ・ペーパーVol.7は、1970年2月に閉山した尺別炭砒で、最後の中学校教頭であった松実寛氏による講演「尺別炭砒の閉山と子どもたち」の記録です。この講演は、2014年8月1日に早稲田大学文学部社会学コース嶋崎ゼミ「“生きている炭砒”と釧路研究」フィールドワークの一環として、学部3年生、4年生を対象に、釧路市立博物館講堂で行われました。

この講演では、2月の閉山から7月に尺別炭砒中学校が廃校になるまでの半年間に、中学校の生徒たちと教員たちが経験した急激な崩壊の様子を、現場で教頭として指揮をとった立場から詳細に報告していただきました。松実氏は、閉山という未曾有の事態に遭遇した際に「これから起こることを可能なかぎり記録しておこう」と思われたそうです。実際、その後非日常的な事態がつぎつぎに出来し、その対応に追われるなかで、生徒たちに作文を書かせ、校内や地域の様子を精力的に記録・撮影なさいました。そうした当時の資料を用いながらのお話は、学生たちに炭砒閉山という出来事の衝撃の大きさと深刻さを、現実的なものとして理解させるものでした。そこで、この講演を記録として残すことが肝要と考え、釧路リサーチ・ペーパーのシリーズとして刊行することといたしました。本書には、当日の講演内容のほかに、質疑内容、配布資料、参加学生の感想、解題を合わせて所収しています。

松実寛氏には、緻密に準備されたご講演いただきましたことに深く感謝申し上げます。さらに、講演録刊行のご快諾ならびに丁寧なご校正をいただきました。ありがとうございました。また、編者の怠慢から刊行が大変遅くなりましたことをお詫びいたします。

2016年1月15日

早稲田大学文学学術院教授  
嶋崎尚子

### 松実寛氏プロフィール



1933年北海道生まれ。1956年法政大学法学部卒。教員として釧路・根室管内の中学校で勤務。1967年4月～70年8月尺別炭砒中学校教頭。1993年阿寒町立阿寒中学校校長で定年退職。コミュニティ運動専門推進員として釧路支庁総務課勤務（1993年～1998年）。

## 付記

- ・ 本書掲載の写真は、松実寛氏が当時撮影されたものです。今回の掲載にあたってご提供いただきました。
- ・ 本講演の開催にあたっては釧路市立博物館にご協力いただきました。感謝いたします。
- ・ 本書の編集作業は、笠原良太（早稲田大学大学院文学研究科）が担当しました。

## 「尺別炭砒の閉山と子どもたち」

お話：松実 寛氏(元 音別町立尺別炭砒中学校教頭)

2014(平成 26)年 8 月 1 日

嶋崎：今日は元音別町立尺別炭砒中学校の教頭先生であられた松実寛先生に、尺別炭砒の閉山と、そこで学校がなくなっていく中で、一体何が起こったのかという、決して他では経験できない実体験について、お話ししていただきます。それでは、松実先生、よろしくお願ひいたします。

### 1. 閉山の実態

松実:みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました松実と申します。閉山の時に、私は学校の中で最も忙しい教頭をやっていました。そのために、さまざまな経験をしまして、人生が半分くらい狂ったかもしれません。中にはもっと狂った人もいました。生徒も教員も、地域の人も大変だったのですが、中にはいいこともありました。そういうことで、今日は写真や生徒の作文も使いながら、みなさんにお話ししていきたいと思ひます。

私は 1933 年 1 月 1 日生まれで、尺別炭砒中学校に勤めていたのは 36 か 37 歳の頃です。あれから 43、44 年ほど経っていますが、まさか、尺別炭砒のことを話す機会がくるとは想像もしませんでした。今日紹介する写真に統一性も狙いの一貫性もないのはそのためです。その中で、できるだけみなさんに「閉山がどのようなものだったのか」、「尺別の閉山は他の閉山とどう違ったのか」ということを理解していただきたいと思ひます。そして、最も大事なものは、「子どもたちはどんな目にあつたのか」ということです。それから、「教員たちがどういう目にあつたか」、そういうものも含めて、尺別炭砒の閉山が子どもたちや私たち教員に何をもたらしたのかについて考えていきたいと思ひます。

## 閉山後の集落の動き

みなさん、“限界集落”という言葉聞いたことがあると思います。限界集落というのは非常に厳しい言葉で、集落の過疎化が数十年にわたって進み、人が住むに耐えないほど疲弊した状況になった集落をいいます。しかし、実は私が経験した尺別炭砦の閉山の模様からすると、限界集落というのはまだ甘いのです。尺別炭砦の場合は、数十年とか、数年というスパンではなく、ほんの数か月間に、3,000人から4,000人の集落が消えてしまったのです。それは“集落の消滅”とか“集落の壊滅”という言葉で表されることなのです。それほど尺別の閉山は非常に厳しかったのです。

尺別炭砦の閉山は1970年、昭和45年2月27日でした。その前には、閉山反対運動が行われましたけれども、まさか、このような急激な形を予想していた人は、そう多くなかったと思います。ですから、閉山になって生産が停止し、“怒涛の転出”が起こりました。

でも、この言葉は、2月27日に閉山になって、あくる日に家がどんどん壊されて、三千数百人の人びとが出ていった、という意味ではありません。当然、そこに多くの人々が住んでいたわけですから、しばらくは静かだったように思います。もちろん生産が完全に止まって、石炭を運ぶ列車は完全に止まりましたけれども、それ以外の面では比較的静かに、ひと月ぐらいが流れたと思います。

その間は、当然、それぞれの家で、「今度はどこに行くの、どんな仕事をするの」と、家族会議を繰り返しているわけです。そして、役所や関係機関に電話したり、あるいは出向いて仕事を探す、そういうことに使われたのでしょうか。もちろん比較的早く転出した方もいらっしゃるし、もっと長くいた方もいらっしゃいますけれども。ですから、3月末から5月中頃までがこの“怒涛の転出”という状況だったと思います。

尺別の閉山があまりにも急激だったことを表す文章がありますので、紹介しておきます。「5,000人の人びとが住んでいた社宅が、閉山後7か月にして錦町に30戸の人びとを残すのみ」。これは尺別炭砦労働組合が作った『道標』という本の「あとがき」にある文章です。ひどいことです。5,000人の人びとが、ほんの数か月でほとんどい



なくなってしまうという変化は、大災害や戦争の時は起きますが、それ以外ではあまり起きないと思います。

このような状況になった時、集落の人びとの心のつながりはどうなるのか。今まで団結し、心をひとつにして、何年もがんばってきて、石炭の生産もどんどん上がっていましたし、その連帯感はどうなるのか。自明なことです。力を合わせていたところ、ポツリ切れて生産がゼロになってしまったわけですから、連帯感が薄れるのは当たり前です。みんな大事なことは自分のことです。それぞれが「今度どこに行くか」、「仕事があるかないか」ということを中心に考えているという地域になった。でも誰も非難できません。

この他に、閉山直後にどういう動きがあったかというところ、閉山からおよそ3か月経った5月14日に地区住民懇談会、つまり行政機関と炭鉱の方々、それに住民が参加していろいろな連絡を受けたり、意見交換する会が催されました。水道も電気も全部会社もちでしたので、懇談会で「電気や水道は明日で会社から離れます」と言われました。また、浴場も会社がやっていました。蒸気でお湯をふんだんに使って、私たちはいつでも入れたのです。それが「15日から重油風呂に代わって1日おきにしか入れません」と言われました。さらに、尺別炭砒病院もなくなりましたから、「炭砒病院の救急の代わりとして、町立病院が患者を受け入れます」と。ほかにも給食のことなど、会議の中で一方的に知らされました。「炭山の郵便局がなくなりますよ」というのも5月31日、「警官がいなくなります」、「炭鉱の幼稚園がなくなります」ということも伝えられました。閉山から3か月ほど経つとこれらのものを必要とする方々は極端に減ったということです。それだけ、急速に人が出て行ったということの証左でもあります。

## 尺別集落について

閉山が短い期間にどのように進んでいったのかについてお話する前に、尺別の地勢や集落について紹介します。尺別炭砒は尺別炭砒鉄道によって国鉄の尺別駅と繋がっ

ていました。そして、国鉄とほぼ平行して、国道 38 号が滝川から釧路まで走っていて、分岐した道路(道道)が尺別に入っています。ですから尺別への交通路は鉄道と道路でした(右図参照)。

そして、集落の全体に炭鉱住宅、いわゆる炭住がありました。他には、学校や病院、それから健保会館があって、炭鉱の総元締めである炭鉱会社の事務所がありました。雄別炭鉱株式会社尺別鉱業所という、会社の総本山がこの一番奥にあったのです。それから、尺別ではとても有名な川、正式には尺別川というのですが、地域の人が“黒川”と呼ぶ川が流れていました。この黒川は、尺別の人にとって忘れられない川なのです。

どうして、この“黒川”という名前が付いたのか想像できますか。これは、選炭場で 24 時間坑内から出た石炭を洗い、その真っ黒い微粉が川に流れ込んで水が真っ黒になるためそう呼ばれていたのです。24 時間、何年でも真っ黒。今でしたら公害という点で非常に問題ですが。

川は中流からその下あたりまで、だんだんと澄んできますけれども、私たちが住んでいたあたりは、真っ黒な水が流れていました。それが、冬になると微粉炭が氷の上に乗って、その時に水が引くと川の氷の上に微粉炭の層ができるのです。それを教員住宅の奥さん方が丸めて、物置の屋根に干すのです。そうすると、石炭(塊炭)ができるのです。まあ、炭鉱では石炭は安いですから半分趣味です。私どもがいた頃には、会社が 1 トン 200 円で支給してくれました。いずれにしても、この黒川は尺別の象徴で



尺別炭鉱の位置と鉄道網



尺別集落を流れる黒川(尺別川)

す。だから、転校していった子どもたちに出した通信のタイトルも「黒川の絆」にしました。

### 集落の急激な崩壊

それでは、炭鉱が閉山して集落が急速に崩壊していく様子についてお話します。集落には見渡す限り炭鉱住宅がありました。ほとんど2戸長屋でしたが、錦町という町には、大体職員が住んでいたの、1戸建ちでした。そのような家々が、閉山から数ヶ月の間になくなりました。住宅はどんどん壊されて廃材として運び出されるのですが、トイレの部分はおいがついているので残ります。どこかに売る時も安値で、売れないこともあったからです。閉山後に撮った写真にもあるように、2戸建ちですからペアになって残るのです（写真参照）。住宅の解体を請け負う会社によってはトイレを残さない会社もあるので、疎らに残っているところもあります。このような光景はほかの炭鉱にもありました。



閉山前の尺別集落



閉山から数か月後の尺別集落

そして、先ほど“怒涛の転出”と言いましたけれど、3月末からはトラックがかなり大きな荷物を積んで出て行くという光景が見られました。道路は学校のすぐ横を走っているのでよく見えました。会社の方は、もう少し早い時期にいろいろな施設を解体して、坑内に残った物はかなりなものを捨てたそうです。電柱や高压線の撤収、それから選炭場を解体して鉄材などを売るために運ぶわけです。そして、施設ばかりではなく、住宅を解体して枠をつけて、山ほどの木材を積んで、どんどん出ていきました。

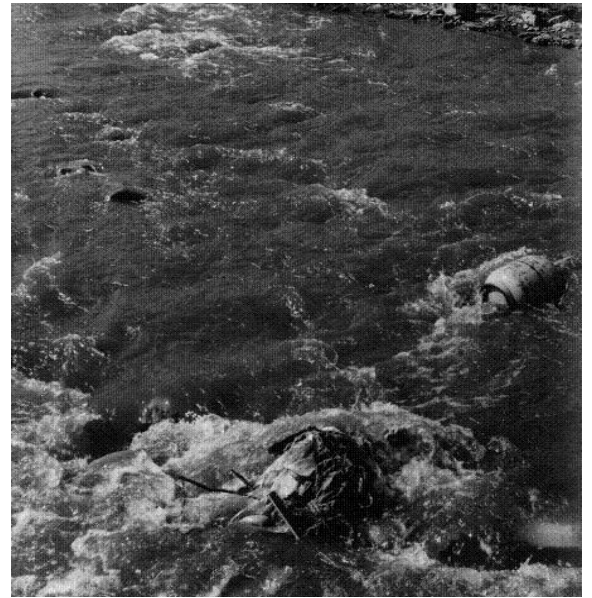
その合間には、バスや乗用車が人を運んでいきます。人や住宅の廃材、会社の廃材などがどんどん道路を走り回りました。だから、“怒涛の転出”と言ったのです。3月末から5月半頃までですから、あまりにも急速でした。そのわずかな期間にほとんどが転出してしまったのです。

それから、尺別炭砦中学校のグラウンドにあるバックネットのすぐ後ろを炭鉱鉄道が白い煙を吐いて走っていたのですが、閉山後、炭車は引っ張っておらず、人を乗せる客車だけを引っ張っていました。ところが、それほど経たないうちに、もうレールがなくなっていました。長い期間をおかないで、客車は止まり、そしてレールも、やがて枕木も撤収されました。

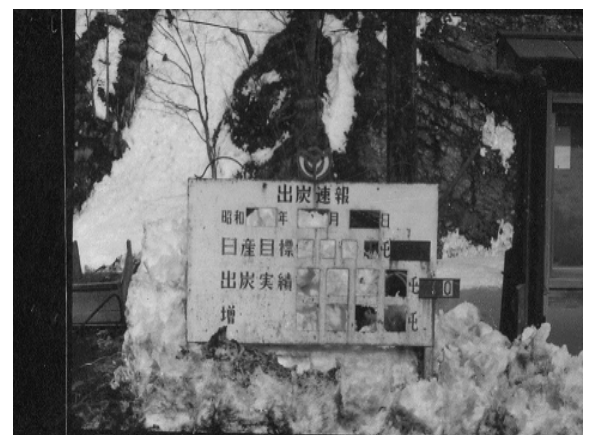
先ほど紹介した黒川は、炭鉱が閉山になったとたん澄み始めました。だんだんと底が透けてくるのです。その頃の集落はすでに崩壊しています。尺別の人びとは愛着を持って黒川を見て接していたのですが、閉山になって、プロパンのタンクなどが黒川に捨てられていました（写真参照）。

このようにして集落の崩壊は急速に進んで行きます。閉山前には、集落のあちらこちらに出炭速報がありました（写真参照）。生産目標の数字を掲げて、どこまで達成したか、それから昨日との増減はどうだったかについて示して、働く人の意欲を高めるという意味がありました。

その出炭速報が半分雪に埋もれている光景を見て、「ああ、閉山したんだなあ」ということがしみじ



閉山後の黒川（尺別川）  
1970（昭和45）年



雪に埋もれる出炭速報  
1970（昭和45）年

み伝わってきました。

それから、閉山しますと人買いみたいに求人が殺到しますから、それに対して職安がコントロールするために掲示板を出していました。

手短かに紹介しましたが、これが炭鉱の崩壊の様子です。短期間での閉山の姿の少なくともある部分は紹介できたかと思います。それでは、生徒が閉山をどういうふうに見ていたのか、何を考え、どう見て、どういう思いで学校に通いながら、どういう思いで去って行ったのかという点について、これからお話しします。

## 2. 閉山と尺中の教育

### (1) 閉山が生徒・教員に何をもたらしたのか

#### 生徒たちにとっての「閉山」

閉山・閉校という現実を子どもたちはどう見ていかということで、作文を紹介します。ひとりで2ページから3ページ書いています。「炭鉱閉山に思う」という題で書かせました。子どもの文章ですから、あまりいい文章でも、特別優れたものでもないかもしれませんが、子どもの素直な気持ちが書かれています。たくさんあるので、4人分を紹介するにとどめます。

2年生の男子がこのように書いています。

閉山を決めたのはだれだろう？何よりも、今笑いながら遊んでいるみんなとも、一生懸命勉強している友だちともこれで別れてしまうなんてあまりにもひどすぎる。みんなどこへ行ってしまうのだろう。いずれは中学校を卒業してみんなと別れるとは思っていたが、まさか「閉山…」でとは思ってもみなかった。

もうひとり、2年生の男子は、

今でも行くところが決まっておらず心配でたまりません。ここにいつまでもいたいと思います。この尺別に誰もいなくなり荒れ果てるまでいたいという気持ちも持っています。これは本当です。向こうで行く高校の程度は高いか、僕でも入れると

ころかな？家はどんなところかな？時の運と諦めなければと思いながら、それでも不安で困ります。

3年生の女子はこのように書いています。

この炭鉱が続くことは、今は夢でしかなくなってしまった。わたしの家でも父の仕事が決まったら、そこへ引っ越さなければなりません。本当に父に適切な仕事が見つかるのだろうか。私の転校はうまくいくのだろうか。できなかったとき就職口はあるのだろうか。未定、未定、未定で、いても立ってもいられない不安に駆られるのです。

もうひとり、3年生の女の子は、

閉山というものは、私たちの故郷と母校をなくし、友達と別れさせ、大変さびしい思いをさせる憎いものです。しかし、これも一つの試練かもしれません。私はこのようなことには負けないで生きていかなければならないと思います。

#### 閉山が生徒と学校にもたらした第1のもの

4人の生徒の思いを紹介しましたが、このようにしてみますと、子どもたちはあまりにも幅広い、たくさんの深刻な問題を同時に抱え込んでいます。そのような状況の中に放り込まれたということがわかります。

具体的にどういう問題かといいますと、ひとつは、何と言っても住み慣れた土地を離れるということでしょう。それから、今後の家族のあり方も考えています。親の仕事があるかどうか、それも重大な問題です。それから、多くの友だちと別れることもとてもいやなことです。しかもひとり、ふたりと別れるのではなく、いっぺんに消えていくのです。新しい土地での進学、就職、周囲の状況の変化など、幅広く深刻な不安に直面せざるをえなかったということです。

一般的に不安や課題、問題というのは、ひとつのあることについていいますが、この場合は、あれもこれも、周りが心配の種だらけなのです。同時多発的という感じな

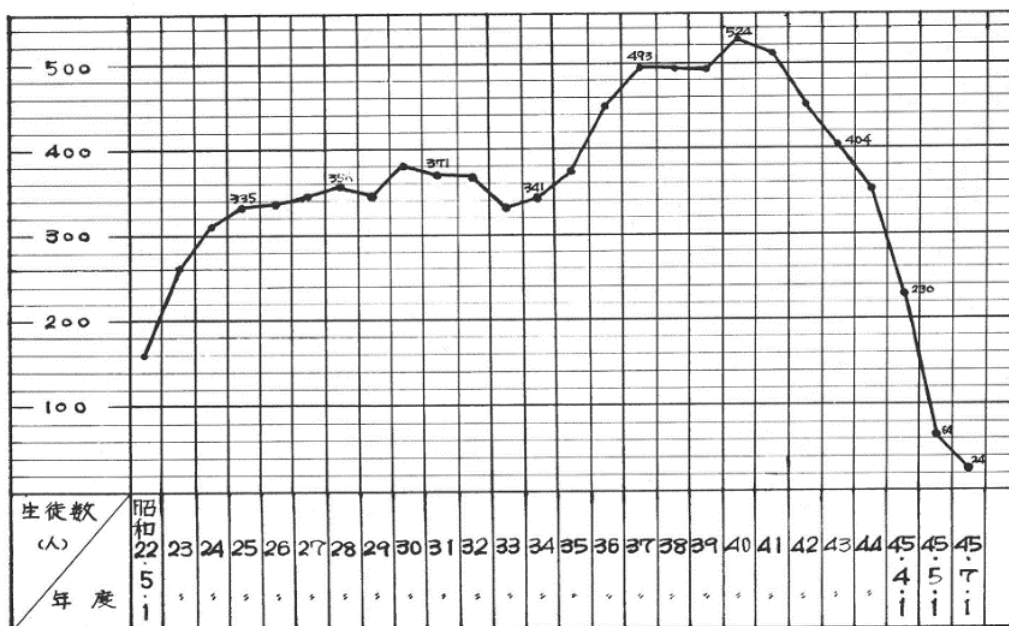
のです。そういうところに放り込まれたということなのです。

もし大人であれば、精神的には少しは鍛えられておりますから、こういう環境になった時にも何らかの形で脱出するために、いろいろと考えて行動を起こせるでしょう。でも、中学生というのは、あまりにも人生経験が乏しい。そして、何よりも、非常に多感なのです。みなさんはどうであったかわかりませんが、私は小学生、中学生、高校生を見ていて、中学生が最も多感で、教えていても最もおもしろくて、やりがいがありました。でも、それは少し間違ふといろいろなことが起きます。多感な子どもたちが、こういう目に遭わなければならなかった、こういう思いをしなければならなかった。これが、閉山が学校教育にもたらした何かというものの答えのひとつです。あまりにも過酷な精神的な重み、それが、閉山が学校教育にもたらした、あるいは子どもたちにもたらしたもののひとつといえます。

### 閉山が生徒と学校にもたらした第2のもの

閉山が学校教育にもたらしたもうひとつのことは、学校教育そのものに対してストレートにダメージを与えたということです。

尺別炭砒中学校は 1947（昭和 22）年に新制中学として発足して、はじめは百何十人だった全校生徒数は、炭鉱が隆盛になるにつれて増えていきました（グラフ参照）。



尺別炭砒中学校生徒数の推移

それに伴って校舎は増築され、いかにも継ぎはぎだらけの校舎といった様相です。校庭にはバレーコートやスケートリンクもありました。1965（昭和40）年ころには、全校生徒数はおおよそ500人にもなり、校庭に「尺中」という人文字を書いたり（右上写真参照）、運動会でマス・ゲームなどをやるほどでした。



尺別炭砒中学校と「尺中」という人文字  
1965（昭和40）年頃

それから次第に生徒数が減少していきますが、閉山後の1970（昭和45）年3月におこなわれた最後の卒業式では、100人以上の卒業生を送り出しましたし（右中写真参照）、4月1日時点では、まだ全校生徒は230人いました。ただし、3月末から転出が増えだして、4月5日ころにおこなわれた入学式では、一学年の生徒数が減少している様子がみられました（右下写真参照）。



第23期卒業生と教職員  
1970（昭和45）年3月

翌月の5月1日には、全校生徒数は64人になってしまい、わずか1か月で166人も減ったのです。ふつう、このような急激な生徒の減り方は考えられません。1日あたり7名が転出したこととなりますが、1日あたりの平均を



1970年度入学式  
1970（昭和45）年4月



出すことはあまり意味がありません。なぜなら、均等には出ていかないからです。ある時は 20 人も転出したり、ある時は 2、3 人と、ランダムに、なおかつ男女別もめちゃくちゃです。職員室の事務職員のもとには、転出書類を取りに来た父母のみなさんが、同時に複数人来ていました（写真参照）。時には、職員室に入りきれず、廊下に椅子を並べて待ってもらうこともありました。



転出手続きをしている父母たち  
1970（昭和 45）年

このような急激な生徒数の減少の中で何が起きたかという、まず、たった 1 か月で学級編成を大きく変えざるを得ませんでした。私たちは 1970（昭和 45）年 4 月 1 日に 230 人の生徒を対象にして、6 学級編成の新学期をスタートさせたのです。すると、その 1 か月後には、全校生徒数が 64 人になってしまい、6 学級は全く成り立たなかったのです。ひと月前にやった作業はすべて役に立たないという状況になりました。6 学級のままだと 1 学級 10 人になってしまいます。そこで、急遽学級数を半分にして 3 学級編成にしました。

半分にしても、その間、生徒数はどんどん減ります。すると、学級、教科、クラブ、生徒会の委員会などのあらゆる学校内組織が、大きく変化し続けるわけです。それこそ川の流れるように変化し続ける。まあ、あえて言うと、混沌状態というか、カオス状態なのです。

この減り方が、非常にランダムで、見通しがききませんでした。「こういうふうになるのかな、それとも直線的にこういうふうになるのかな」と予想しても、誰にもわかりません。つまり、「どこの家が、いつ出て行くのか」ということは、誰にもわからないのです。その家の人も「1 週間後にここにいるのか、いないのか」ということは、わからないのです。そういう子どもたちで、私たちは教育をしていたわけです。そし

て、そういう子どもたちで、生徒会の委員会や、掃除区域の分担、あるいは生徒の評価方法などを決定していくわけです。特に、私たちの学校では学級のほかに班の活動をととても大事にしていました。みなさんの過ごされた学校にもそのようなものがあったかもしれませんが、班を学級のなかに作って、それらがお互いに学習を助け合ったり、生活の問題を話し合ったり、帰りの会の反省会をやったり、あるいは当番をやったりなど活発に活動してきました。しかし、生徒数が減ることで、そういう班を作るのが難しくなったのです。

具体的にお話しますと、たとえば、1学級 40 人いた場合、5つか6つの班を作り1年間固定にしていました。しかし、閉山後では、今日5人の班だったのが、翌日になると2人の班になるようなことが起きたのです。すると、班として成り立ちません。では、「隣の班と一緒にしようや」ということが日常的に起きるのです。それから、掃除の班では、「何曜日にどこの何を掃除する」という表を作りますが、何日も使うことができないのです。たとえば、どこかの廊下の掃除を4人で分担していたのが、翌日になると2人になってしまうかもしれない。「掃除できない」となると先生に言いにくる。そうすると、ほかの班に手伝ってもらわないといけなくなる。そういうことの連続でした。

学校のなかにたくさんある組織を作っている子どもたちが、「出たり入ったり」ではなくて、「出たり出たり」なのです。もう、出っ放しです。そのために、校内組織はメチャメチャになってしまう。授業は生徒が減っても同じように確実にやりますけど、校内組織はメチャクチャになりました。今でしたらコンピュータやなにかを使えば、案外予想できるのかもしれませんが、「明日だれが、何人来るのか」という基礎情報がわからないわけですから、どんな優秀なコンピュータでも、ベストな組み合わせはできないでしょう。ましてや、その頃、学校にコンピュータはありませんでした。

教科指導も変則的になりました。1か月前に決まった教科担任が、3学級になると、教科担任も変わる可能性が大きいのです。生徒たちからすれば、せつかく「あの先生の教え方はこうだから、勉強の仕方はこうでいいね」ということになったと思ったら、

クラスが変わってしまう。なかには、教員の都合で変わったこともありました。教員は、「学校がある限り転勤しないようにしよう」ということを申し合わせましたけれども、私の学校では3人の教員が7月20日を待たないで転勤していきました。中学校の場合、教員が転勤するイコール教科に穴が開きます。そうやって教科担任が変わって、生徒たちが慣れたと思うと、また1週間や2週間で先生が代わってしまうということが起きました。

このように、班も委員会も学級も、非常に流動的になってしまいました。あえて言えば、先に述べたように、混沌とした、カオス状態のようなものが1か月半ほど続きました。

#### 閉山による良い影響：少人数授業

一方で、先ほど「悪いことばかりではない」、とお話ししましたが、生徒数が減って少人数授業になると行き届いた教育ができるようになります。体育の授業では、広いグラウンドに体育の教員と数名の生徒のみ（写真参照）。のどかと言えばのどか、哀れと言えば哀れですが、本当に行き届いた教育ができるのです。特に、実技科目ですと、教員の指導力をきちっと生徒に伝えるには、人数が少なければ少ないほどいいのです。しかし、競争意識は弱くなり、あまりにもグラウンドが広すぎて侘しいのは否定できません。



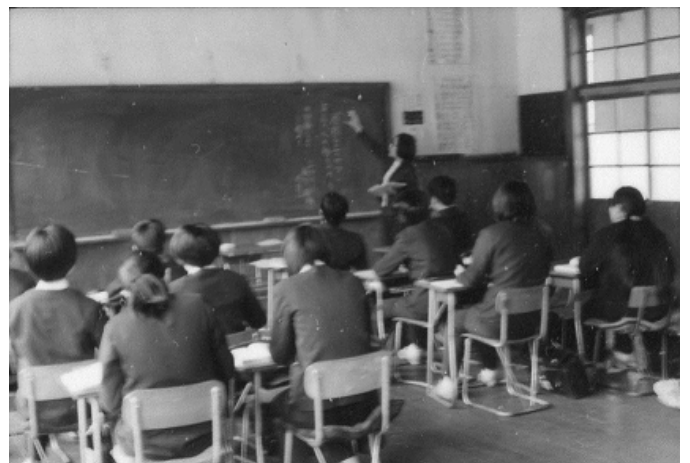
生徒3人の体育の授業風景  
1970（昭和45）年

少人数になると、あまりにも、ナアナアになってしまうという欠点がありますが、教師と話す時間が非常に増えますから、そういう点では能率が上がります。私たちは、授業形態について一斉授業やグループ指導、個別指導と、いろいろと分類するのですが、的確に対応していくことを急に求められたのです。小さい学校での経験がある教員は、慣れていてなかなか上手なのですが、尺別炭砦中学校の教員は、大きな単式の学校でしたので、当初は戸惑いがありました。そこで、生徒たちが次の学校に行った時に困らないように「授業形態をどうするか」、「どうすれば一番生徒に力がつくか」ということの研究を重ねました。そして、いろいろな授業研究も実際にやりました。そういう時間は、幸いにしてあったのです。なぜかという、生徒がどんどん減った割に、教員は減らなかったからです。ですから、生徒に対する教員の定員が、一時期は大だったのです。すると授業研究で、「今のよな授業形態では、あそこは失敗した」、「あれは成功した」ということにより時間を割くことができました。

生徒が少人数になって、あまりにも侘しいということは事実ですが、一方で良い面もあったのです。

### 閉校直前の教室の様子

ただし、生徒が減っていくことは生徒たちにとってはたまらないことです。まだ一斉授業をやっている段階でも教室はガラガラ空いていました（写真参照）。そして、閉山から4か月ほど経った7月には、ひとつの教室、ふつうの1年生の学級が2人だけになってしまいました。グループでも、特殊学級でもないふつうの学級です。はっきり言って、かわいそうでした。



授業風景  
1970（昭和45）年

その2人のうちの1人の女の子が書いた作文があるので紹介します。

昨日7月1日からなおさみしくなりました。昨日まで1年の女子は4人いました。けれど、2人もいっぺんに減ってしまいました。休み時間でも2人しかいないので何をやっても面白くありません。毎日「あの2人がいないとさみしいね」と思い出話をしています。前は4人でも案外楽しかったのに2人も減ったのでさびしくて泣きたい気持ちになることもあります。

4人からいきなり2人になる（写真参照）、せめて1人ずつだったら、少しは違ったのでしょうか。緩衝の時間、ショック・アブソーバーというものが無いことが、尺別炭砒閉山の悲劇的な状況なのです。あまりにも急速に、爆発的に変わってしまったということなのです。



閉校直前の教室  
1970（昭和45）年7月

#### 教員の途中転出、清掃範囲の拡大

今までお話ししたことが、閉山が生徒にもたらしたものの2つ目、つまり、閉山が教育の質、教育活動そのものに対してどのような影響を与えたかということです。ここで、一区切りなのですけれども、その他に、変則的な教育ということで、さらに挙げるとするならば、ひとつには、教員の途中転出です。先ほども言いましたように、うちの学校からも3名の一般教員が途中で出て行きました。個人的な希望や、教育委員会の意向があって仕方がないといえ仕方がないのですが、ひとつだけ、いやなことをお話しすると、隣の小学校の校長は5月1日で転出しました。これは、会社や役所などが参加する地区別の懇談会で大問題になりました。「何という人事だ」、「絶対に認められない」ということを、住民側や会社側は頑張りました。しかし、教育委員会

は「わかっていただきたい、ご理解いただきたい」のひと言でした。なぜ問題かという、すでにおわかりかと思えますけれど、生徒は毎日毎日、「今日は誰が来て、明日は何人になるの」と、この先どうなるのか不安でしょうがないのです。なるべく人は多くいつまでもいてほしいのです。それが、校長が私たちよりも先に出て行ったら、どんな思いになるでしょう。そういうことで、教員組合も反対しましたし、炭鉱労働組合組織も反対しましたが、教育委員会は断じてそれをやってしまいました。

それから、その他の問題としては、生徒が「清掃作業が負担だ」ということを家に帰って言ったり、担任に訴えたりするようになったことです。どんどん生徒数が減りますと、当然、広い校舎を分担します。使わないところはもちろん掃除していません。それでも、1人あたりが広いのです。先ほどの2人だけの教室だって、あの2人が教室を手抜きしながらでも、清掃しなければいけないのですから。そこで、教員も掃除するというにしました。

ちょっと一息つきますか。何か聞いてみたいということがありましたら、遠慮なく聞いてください。

**嶋崎**：学校が7月20日で閉校になることは、いつ決まったのですか。

**松実**：それは、前年度のうちに決まっていました。3月の初めにはもう決まっていたのです。私たちも伝えられていたのです。懇談会でも伝えられました。学校がいつまでであるのかということは、地域住民にとっての関心事ですから。それから、風呂はいつまで入れるのかということも、全部関心事です。

## (2) 私たち教員はどう対応したか

それでは、次に私たち教員が何を考え、いかに対応したかという話に移ります。

実際にその時に残った教員は、美辞麗句かもしれませんが、基本的にはみんな非常に強い連帯感を持っていました。自分たちが同じような目にあっているという意味で、困難な状況の中でも、教育を守るということを基本に、「何もかも、できる限り

昨年までと同じように」をスローガンにしていました。そして、「生徒たちの次なる時間のために学力を保障する」ということを2番目のスローガンとしました。つまり、今、いくら困難な状況にあったとしても、彼らには次の時間があるわけですから、何としても学力をつけてやらなければならないということを中心にしながらやりました。

### 淋しくもあり 楽しくもあった 修学旅行

「何もかも、できる限り昨年までと同じように」やった実例として、ひとつには修学旅行があります。3年生は16人しかおらず、生徒たちは「今年は閉山になってとても悲しいね。修学旅行もできないよね。修学旅行もないよね」というようなことを作文に書いていました。私たちは、「できる限りは昨年と同じようにやりたい」のスローガンのもと、「何としても修学旅行をやりきる」、「できる限りはやる」と修学旅行を生徒数16人でできないだろうかと検討しました。前年まで20年間にわたって、何台ものバスが学校の通りに並んで、みんな学級ごとに分乗して、バスで全道のあちこちを見学するか、釧路駅までバスで行って、列車に乗り換えて見学地を回るという、そのどちらかをやっていた。ところが、16人では貸し切りバスも、列車の1輛も貸し切ることができないのです。そのことを教育委員会も知っているし、生徒も知っていました。だから、「修学旅行はできないね」ということを言っていたのです。でも、私たちは「断じてやる」、「とにかく、こちらなりの方法でもってやるから」ということを教育委員会に伝えました。

生徒数16人、引率2人でバスで釧路駅に行きました。出発には父母も見送りにきました。そこから鉄道に乗り換えるのですが、1輛を貸し切ることができませんから、一般客と混乗します。ただし、車掌さんが「ここからここまで何々学校の生徒さんね」と分け



最後の修学旅行、出発前の様子  
1970（昭和45）年

てくれます。だから、必ずしもゴチャゴチャになることはありません。割引も規定があつて、割引率も前年とほとんど変わりませんでした。このようにして、断じてやったのです。今までと同じように、16人で「しおり」も作つて、終わったら「修学旅行記念文集：寂しくもあり 楽しくもあつた 修学旅行を終えて」という冊子を作りました。

このようにして、困難の中、見事にふつうどおりの修学旅行をおこなつたのです。「できないということを断じてやる」、そういうつもりで私たちは取り組んだのです。「できる限り昨年と同じように」、「生徒をこれ以上悲しませないように、これ以上惨めな思いをさせないように」ということを貫けました。私たちにとって大満足。今でも大いに誇りに思っております。

### 学校給食

そして、「できる限り昨年までと同じように」やったもうひとつの実例は、学校給食です。生徒が1日7人も、ある時は30人くらい減るかもしれない中で給食をどうすればできると思いますか。給食は、ふつう、来月の給食計画というものがあつて、何年何組は何人と、全部弾き出されていて、それに応じて給食費が徴収されます。それによって物品を購入して調理します。私たちの学校は自校給食でしたから、自分たちの学校にスチームの釜などがあつて、非常にいい給食ができていました。炭鉱の購買は物品が安く良質でしたので、それを使ってやっていたのです。

給食についても、教育委員会は「どうやってやるの。そんなものできないでしょう」という感じでした。でも、私たちは「この時こそ給食が必要だ」ということを感じていました。つまり、ふだんはお母さんやお姉さんが家において、弁当を作ってくれるかもしれないけれど、こうやって閉山になつて、お母さんがいろいろと動き回ったり、引越しの荷造りをしなければならなくなりました。その時になつて、尺別の生徒はずっと給食に慣れていたのに、給食を切るとするのは理不尽な話だということです。

しかし、技術的にはできないということは誰にでもわかります。どうやって明日の材料を調達するのか、何を基準にして複雑な予測をしていくか。それでも、私たちは



やりました。お金をどのように集めて、どのように処理したのかは、思い出そうとしても思い出せないのですが、自校給食ですから、給食が足りなければ教員の分を足せばいいし、余ったらどうってことないのです。ただし、最も面倒だったのは、いつ、誰が転校するのかわからない、お金をどうやって集めればいいのか、ということでした。でも、やり切ったのです。中心となった事務職員などの労に負うところが大きかったです。これも私たちは大いに誇りに思っています。

### 教育条件整備、備品整理

それから、次は、「教育条件整備」、あえて言うならば、事務職員と管理職、校長や教頭の仕事についてです。閉山となって閉校になると、大変なことになります。経験してみなければわかりません。苦勞もしましたが、いい勉強にもなりました。どういふことかと言いますと、学校にいろいろな備品があります。今でしたらもっと多いと思いますが、昔も、テープレコーダや幻灯機、それから、最近は電子機器を使うからあまりないかもしれませんが、掛図などがありました。その中には古いものや破れたものもあります。それらを、全部整理して、引き渡さなければならないという莫大な仕事があるのです。たとえば、テープレコーダや古い教材には、廃棄処分の書類を1枚1枚書いてきます。点検しながら書類をずっと書いて、いよいよ捨てるものを全部集めます。校舎の南側にスケートリンクがあったのですが、そのスケートリンクの沢に、古い備品や教材などを全部放り込むのです。そして、上から石油をかけて、火をつけました。今だったらそんなことはしませんでしょ。教育委員会がゴミ収集車を回して、それに積んで、市町村が経営するゴミ処理場に運んで行くことが当たり前ですが、当時はそうはなりませんでした。ですから、自分たちで、すべてやりました。使えるものは使えるものとして、全部点検した上で集積して、教育委員会へ引き渡さなければなりませんでした。

ふつう、こういう作業は教諭の仕事ではないのです。法律上もそんなことをやる義務はないのですが、校長と教頭、事務職員の3人ではできるわけもなく、組合員の先生もみんな手伝ってくれました。そして、生徒も手伝ってくれました（右上写真参照）。広い校舎にたくさんの清掃用具がありますから、生徒たちも手伝ってくれて、屋体などに全部整理しました。



備品整理を手伝う生徒  
1970（昭和45）年

### 新しい校門をつくる

それから、閉校が決まってから生徒たちと一緒に新しい校門を造りました。「意地だろう」と言われるかもしれませんが、意地ではないのです。

尺別炭砦中学校には、櫟（くぬぎ）の木でできた古い校門がありましたが、もうボロボロで、触ったら崩れ落ちそうな校門でした。閉校が決まってから、その古くさい門が今にもダメになりそ



生徒と教員による校門の基礎工事  
1970（昭和45）年

うな学校を象徴しているようだったので、私は撤去しようと思いましたが、「俺が設計するから作る」ということにして、レンガで校門をつくることにしました。私自身、土建屋でもなんでもないので、これをやるために役場に行って、土木係にレンガを積む時に使うモルタルのセメントと砂と水の配合について習ってきました。そのとおりにして、穴を掘り、近くの河原から石を拾ってきて放り込み、基礎を作って積んだのです。もう、生徒たちも一生懸命にコンクリートを練ってくれました（右下写真

参照)。

そして、見事に完成しました(右下写真参照)。間もなく学校がなくなるというのにやったのです。これは、半分意地もあるかもしれませんが、何よりも、「もう何もかもなくなるという惨めな思いを跳ね返してやろう」、「生徒への励ましにしてやろう」という狙いでやりました。

ところが、それから1年ぐらい経って行ってみると、ブルドーザーで学校のものみんな平らになっていました。せめて、せっかく作った新しい門ぐらい残して置いておいてくれればよかったのに、と思ったのですが。



閉校前にできた新しい校門  
1970(昭和45)年

### (3) 閉山・閉校を振り返って

#### 教育行政との関係

行政との関係について言いますと、いろいろと言いたいことがありますけれども、ひとつは「日本における教育行政の根本的課題」です。先ほどの修学旅行や給食についても、行政は考えが違いました。そして、いろいろな物品を片づけるなどの作業をしましたけれども、私たちはただでさえ学校のことで忙しいのだから、教育委員会が人を頼んで、あるいは企業に下請してやらせてもらえば。

一方で、こんなこともありました。私や生徒がまだ学校にいた時、町の職員か教育委員会の職員が来て、校庭の庭木の根巻きをおこなって、テープを巻いて、荷札を付けていました（写真参照）。よく見ると「音別公民館行」と書いてあるのです。つまり、尺別炭砦中学校が閉校になったら、この木は音別公民館に行くというのを生徒が通っているうちにやっていたのです。もう少し配慮があつてしかるべきでしょう。



閉校前に根巻きされた庭木  
1970（昭和45）年

人事異動については「行きたいところに行けた」という教員もおりました。それまでは人事異動はなかなか難しく、私たちが「行きたい」と言っても、教育委員会のコントロールでなかなか望み通りにはいかなかったのです。郡部からは釧路市でさえ簡単に行かれなかったのです。ところが、閉山時の年度途中だけは、教育委員会がいろいろと特例を認めて、「苦勞したのだから希望を叶えよう」と、ふだんは行かれないところ、たとえば、渡島や札幌市、石狩市、それから釧路市などに行きました。

閉山が教員になにをもたらしただのか。これは、私自身のことだけ話しても何時間もかかるぐらいたくさん経験をしました。私にとっては非常に貴重な経験でしたが、「人生を変えられた」、「人生を狂わされた」と言う者もおりました。

## 尺別の悲劇的状況の2つの要因

子どもたちの苦悩と困難の根源は一体何だったのか。それは、あまりにも急激な地域社会の崩壊、これがすべてでした。これが、2、3年、最短でも1年というスパンで撤退していくのであれば、いろいろな計画が立ちますけれども、ほんの2、3か月の間に片づけようというのですから、まるで家主に「明日の朝までに、借家から出て

いけ」と言われるみたいな感じなのです。

それから、もうひとつあえて挙げるとすると、尺別という集落の地勢的な特殊性です。尺別は、尺別の炭鉱集落以外に周りに何もありません。ところが、たとえば、同じところに太平洋炭鉱が閉山になったとして、尺別のようなことが起きたか、同じような寂しい思い、惨めな思いをしたかと言うと、あまり起こらないか、程度が違うと思います。釧路には炭鉱がなくなってもいろいろな施設がたくさんあるし、家もたくさんある。閉鎖的なところにある尺別の集落は、炭鉱がなくなると本当にゼロになってしましますが、太平洋であればゼロにはなりません。いろいろなものがそのまま残って、地縁があって、お互いに助け合ったり、支え合ったりできる。だから気持ちも随分楽でしょう。尺別炭鉱の悲劇的状況の原因は、この2つの条件があるのでしょうか。

#### 転出後の生徒たち、手紙のやり取り

次に、尺別から出て行った子どもたちが、その後どのように生きているのか、ということについて、送られてきた手紙をもとに紹介します。

私は転校する生徒に、封筒と原稿用紙を持たせ、「新しいところに行ったら、とても忙しいし大変だと思うけれども、もし、心にちょっと余裕ができて、その気になったら、尺別の友だちやなにかにも知らせるから、お互いに交流できるように先生が仲立ちするので、これに手紙を書いて送ってちょうだい」と言いました。すると、全員ではありませんが、たくさんの生徒から手紙が送られてきました。私は返事として、「黒川の絆」という学級新聞のようなものを送ってやったのです。新しく送ってきた子には前の「黒川の絆」と一緒に送りました。

彼らの手紙から子どもたちがどう生きているか、移った先でどうやって生きているかがわかるわけです。初めの頃は、やはり「さびしい」とか「悲しい」と書いてきました。その一部を紹介します。アコという子からの手紙です。

アコが入った組は2年1組です。みんなしーんとしていていやです。友達もあまり作れません。毎日いやでたまりません。でも、明日には希望があります。それを

目指して一生懸命努力するつもりです。2年生になってどんな気持ちですか。アコも卒業するまで尺別にいたかった。

次はチロという子の手紙です。

チロと別れてさびしいでしょうね。私も尺別のみなさんと別れて毎日泣いています。もう一度尺別に帰りたくてしようがありません。「2年A組」「校舎」「山々」など懐かしいことばかりです。今度東京へ修学旅行があります。行く気はありません。北海道へ行きたいなー。

次は、横浜に行った子の手紙です。

私は学校の友達ともだんだん慣れてきました。先生方はみんな優しくあまりきびしくありません。いろいろな点で北海道と違い、住みにくいなと感じることがありますが、私はもう神奈川の県の子になったのだから、もう尺別と比べず、楽しく暮らします。ときどきは尺別を思い出しながら。 (1970年5月12日)

それから、最後に埼玉の大宮に行った子の手紙です。

今日(9月1日)から学校が始まりました。これから猛烈に頑張るつもりです。3年間で今が一番重大な時だと思うからです。新しい学校や土地にはなかなかなじめませんが、今は早く慣れようという気持ちで頑張っています。でも尺別のことは忘れることなく何年か後でもかならず訪れてみたいです。 (1970年9月1日)

以上の手紙をみると、初めのうちは、やはり、「悲しい」や「さびしい」、「泣いている」ということが多いです。でも、後になるとだんだんと、それなりに考えて、「頑張ってその土地で生きていこう」と、「神奈川の県の子になった」などという認識になります。もう尺別とは比べないという決意が表れています。結果的にはよかったなあと思っています。

### この試練に何か意義があったとするなら

最後に、「この試練に何か意義があったとするなら」ということについてまとめます。変化の激しい年代ですし、「なにか意義があったか」と聞かれても、なんとも言えないと思います。しかし、はっきりしていることは、この非常に稀有な体験が、生徒たちのその後の長い人生のなかで有意義に機能する、あるいは機能したであろうことを願うばかりだということです。強靱な心身だとか、柔軟性、あるいは協調性、そして広い視野、他人への思いやりといった精神的によい要素がいろいろな苦難の経験の中から、あるいは友だちや家族、故郷を思う中から身につけてほしいなど、思うばかりであります。

このあたりで終わりにしたいと思います。せっかくいらしたので、なるべくわかっていただこうと思って一生懸命しゃべりました。どうも失礼いたしました。

一同：ありがとうございました。



松実先生講演の様子（釧路市立博物館にて）  
釧路市立博物館学芸員、石川氏撮影

## 質疑応答

嶋崎：大変貴重なお話しでしたので、自由に感想や質問などありましたら、どうぞ。

学生：素朴な疑問ですが、何人か転出された先生がいらっしゃいましたが、そのように簡単に異動願いが受理されるものなのでしょうか。

松実：異動願いは簡単には受理されません。やはり受け入れ先がちゃんと見つからなければいけないので。そうスムーズにはいきませんね。ただ、年度替わりになりますと、「あなたは苦労したのだから、来年の3月の異動期には希望どおりにいくように、なるべく考えますよ」という話にはなります。でも、年度途中では、それぞれ定員はもういっぱいになっていますから必ずしも100%はうまくいきませんでした。

学生：生徒が少ないなかで「教育を守る」ということで教員が一丸となって教育していくという一種の教育のモデルは、今の過疎化が進んでいる地域や限界集落などで活かそうという考えはありますか。

松実：私たちはもう散らばってしまいましたから、そういう組織的なことはできませんけれど、過疎地やもともと小さい集落にある小さい学校、たとえば生徒が9人で先生が10人という学校も釧路管内にはありますが、そういうところでは、初めから、そういうつもりでやっています。ですから、少ない生徒を対象にして、いかにして沈滞気味になるのを避けていくかという研究をやったり、少ない生徒を対象にした時のいい授業、力のつく授業はどうするのかということをやっています。これはその地域に長らく住んでおれば、そういう研究をやりますし、そこに飛び込んだ教員も、そのなかにのみ込まれていって研究をやることになります。でも、私たちの場合は、そういう経験が必ずしもある人が多くはなかったもので、まったく新しい経験でいろいろな悩みも多かったです。だから、一生懸命、勉強もせざるをえなかったということです。

嶋崎：閉山が決まって、地域も、家族も大変になり、おそらく話題も切実な事柄になってくる状況のなかで、子どもたちにとって中学校という場はどういう位置づけだったのでしょうか。それまでの彼らにとっての学校生活と閉山が決まってからの学校生



活というのは、思い入れなり、持つ意味が異なったのでしょうか。

**松実**：まちがいなく言えることは、家にいてもしようがないのだけれども、学校に行ってもどんどん友だちが入れ替わって前のような落ち着いた学校ではない。でも、家にいるよりは、学校に来て、気を紛らわしているということを書いている生徒もおりました。だから、ひとつの面だけではなくて、いい面も悪い面もあります。子どもたちにとって、学校というものは地域にいるよりはいいのです。地域はもうほとんどガラガラ解体する音だとか、解体のゴミがあつて、その間を縫って登校してくるわけです。だから、学校に着くとホッとするということはあります。

閉山になってから来た PTA の役員が言っていましたけれど、「地域はすっかり変わってしまった。あいさつをしても最低のあいさつが返ってくるだけで、とてもさびしい」と、住み心地がよくないことを教員に言っていました。つまり、地域の人間関係自体が希薄になっていますから、子どもはそこにいるよりも、学校に来ると、少なくとも、凝集力がある、連帯感もあるので、そういう意味では救われていたと思います。したがって、学校を休むことはほとんどありませんでした。むしろ学校に行きたいということでした。

**嶋崎**：多感な時期の中学生たちは、日々受け止め方が変わっていく、あるいは、精神状態の差が大きい集団だと思うのですが、実際に生徒と接する際に、気をつけたことだとか、お感じになったことはありますか。

**松実**：私は生徒との接触はあまり多くない方でしたが、やはり、やり取りのなかで、「どうも納得がいかない」ということで、もめることはありました。それは、たくさん生徒がいて、そういうふうなものを相互に打ち消していくという状況とはまた違って、のびのびと本音を言えるという一面があったということです。学級会のなかでも、いろいろな不満が出てきました。そこで、私たちは、「学年便り」とか「学級便り」、「生徒会便り」、それから「中学校便り」といった校内紙を出して、生徒の気持ちをほぐしていく、あるいは、本音を出せるような欄を設けるなどしました（写真参照）。こ

これらの校内紙にたくさんの文章が載っているのです。そういうなかで、子どもたちが他の学年や先生たちと意見交換できるチャンスを設けました。

学生：先生は閉山後に他の学校も回られていると思うのですが、尺別炭砒中学校の生徒さんは、他と比べるとどういう特徴がある生徒さんだったのでしょうか。



中学校便り、学年便り、学級便り

松実：私が歴任した学校は、炭砒の学校だけではないです。14 ぐらいの中学校を回りましたが、漁村も農村も炭砒地帯も回りました。尺別の子どもは、やはり、尺別の地域から影響を受けているのです。ひとつは、尺別というのは炭砒労働組合が一番大きな組織なので、やはり炭砒労働組合の影響はあります。いろいろな掲示板がたくさんありますし、親たちも大体組合員で、いろいろな集会やなんかをやりますから。そして、メーデーもさかんやっていたから、そのなかで育っていくので、生徒たちもやはり団結していました。よく、班を作って何かをするときも、つねに競争するため、団結するためにやるということがありました。それは、産業形態によって、生徒の気質は、大きく変わるのです。炭砒の方は一途であるという感じがします。学校の雰囲気もそうでした。私たちのスローガンも非常に革新的でした。学校教育目標が、「平和を守り、真実を貫く尺中教育の確立」というものなのです。つまり、「平和を守る」とか「真実を貫く」ということは、非常に理想的なのです。そのなかで、生徒たちは 3 年間、教員に接して、何パーセントかわかりませんが、吸収しながら育っていくということはありません。

また、炭砒はある意味では、階級社会なのです。鉱員と職員、職員のなかでもいろいろな階層があります。それによって住宅も違うなど、さまざま差があるわけです。

そこで私たちは階級社会ということ、学校には絶対に持ち込まないことを信条にして、徹底しました。尺別に転入してくる教員に対して徹底しました。

**学生：**細かいことで恐縮ですが、7月20日が小中学校の閉校で、8月10日が廃校となっているのはどういうことなのでしょうか。

**松実：**それは、教育手続きでそういう分類があるそうです。私も当時は知りませんでした。形式的には8月10日になっていますが、あくまでも7月20日です。

**嶋崎：**雄別三山で、雄別と尺別と上茶路とで同時に閉山して、おそらく雄別でも上茶路でも同じように中学校の閉校が生じたと思いますが、連携やそれぞれどうなっているかなどの情報のやり取りはあったのでしょうか。

**松実：**そういうやり取りはしていません。学校によってさまざまな対応を取ったと思います。あまり他校のことを考えたりする余裕がなくて、私たちは私たちが突き進みました。

**嶋崎：**尺別小学校と連携して対応した事柄などはあるのでしょうか。

**松実：**連携したと言えるものはあまりないと思います。ただ、小学校の校長が転出するときに、小学校の教員も私たちも、地域も一緒になって反対したことはあります。

ただ、閉校処理については、学校経営理念や教員集団の理念が違うために、少し異なることが起きました。尺別炭砦中学校の校舎は先に解体したのですが、小学校は残して牛舎として活用したのです（右写真参照）。私にとって非常に気になることは、尺別炭砦小学校の児童たちが一生懸命になって描いた集団画（次頁写真参照）が貼ってある屋体に、牛が入っ



牛舎となった尺別炭砦小学校校舎  
1970（昭和45）年

ていているということです。かつて精魂込めて児童が描いたであろう集団画があるところに、牛の糞と草と一緒にあるということを、私は容認できなかった。そういうことが行われたのです。学校によって、教員集団や校長の理念が異なることによって異なる対応が出たのです。



尺別炭砒小学校の生徒が作成した集団画  
1970（昭和45）年

**学生：**転居した生徒との手紙のやり取りは続きましたか。生徒さんのその後の情報が入ってくるというようなことはあったのでしょうか。

**松実：**手紙はあまり続きませんでした。というのも、私自身が離れてしまったために、生徒たちは私の住所もわからなくなったのです。だから、「黒川の絆」という簡単な新聞も3号で終わりました。もちろん、子どもたち同士でつながっているということはたくさんあると思います。この「黒川の絆」の第1号にこう書きました。「かつて選炭場からの微粉炭を含んで真っ黒だった尺別川が、閉山の影響で日いちにちと澄んだ流れになりつつあった 1970 年の春、尺別を去らねばならなかった古いけれども懐かしい学び舎をあとにした、〇〇君、〇〇さん…」と全部書いて、「お便りをほんとうにありがとうございます。引っ越したばかりの忙しさのなかで、慣れない土地や学校のなかで、まだ気持ちもなんとなく落ち着かないだろうと思われるのに、みなさんはさっそく便りをくれました。ほんとうにありがとうございます。少し遅くなりましたけれども、私も約束どおり、その後の尺別や学校のこと、その他をお知らせします」というふうに書きました。住所録もあって、末尾の赤い数字は郵便番号が書いてあります。そして、手紙を寄こした子どもの名前を書いて、お互いに手紙のやり取りができるようにしました。こういうことを、教頭が雑務のなかでやるということは、自分でも「よくやった」と思いま

す。5月3日くらいになると生徒が減ってしまって、徹底的に忙しい時期は過ぎて、教員もたくさんいますし、あとは少し暇になるのでこういうことをやっていたのです。

閉山という事実のなかで、私は私なりに「ああ、よくやったなあ」というように思います。ただ、学校としてやったわけではなく、写真もなにも私が個人的にやったことでしたから、異動などもあって何年も続きませんでした。

**学生：**学校の授業についてなのですが、教師が転出したり、生徒が転校したりするなかで、閉山を取り扱った授業などは行われたのでしょうか。

**松実：**そうですね、閉山を取り扱った授業はあまりなかったと思います。社会科の時間が一番あったと思いますけれども。ただ、学校便りなどの「便り」にはいろいろな閉山についての意見が出ました。さきほど作文を紹介した時には、「閉山を決めたのは誰だろうか」というのがありましたけれども、「我々は閉山に遭遇したのだから、みんな、閉山を徹底的に考えよう」という組織的なことはあまりありませんでした。部分的にはありましたけどね。

**嶋崎：**まだまだ質問はあるかと思いますが、この辺りで終わりにしたいと思います。たいへん心に残る、そしてこれから考えていくべき課題をたくさんいただいた時間でした。本当に松実先生ありがとうございました。

**松実：**ありがとうございました。

当日配布レジュメ

閉山は生徒に何をもたらしたか

2014年 8月 1日 松実 寛

[初めに] 本題＝閉山は生徒に何をもたらしたか＝の理解を助ける

**閉山の実態＝ 主目的ではない**

- 1 戦争か自然災害に比肩する急激な地域社会の崩壊、消滅  
～あまりにも急激な集落の変化～
  - 2 **45年（'70年）2月27日企業ぐるみ閉山 52年歴史**  
補足＝スライド
  - 4 **事業の停止、経済の転出 ⇒ 3月末～5月初め**
  - 5 「5000人の人々が住んでいた社宅が、閉山後7か月にして錦町に  
30戸の人びとを残すのみ」 9月24日（道標あとがき）
  - 6 人びとの心のつながり、連帯感が？
- ⇒ 以上を視覚的に（スライドで概観）

~~~~~以下、本題、「閉山と尺中の教育~~~~~

《I》 生徒（学校）に何を

⇒ 生徒は閉山の実態をどう感じ、何を考えたか（作文により）

- [1] 余りにも広く、深い困惑・不安・寂しさの深淵に立たされる
- 1 生活の全面を覆う、不安や課題の中に身を置かざるを得ない 状況に  
追い込まれた。
  - 2 人生経験が浅くそれでいて「多感な」かれらには、あまりにも過酷な  
試練。  
☆ これらの精神的な過酷な試練が閉山が生徒にもたらした第1もの  
いまなら.....？

[2] 変則的な教育

- 1 その根本原因？           あまりにも急激な生徒減

|   |             |       |           |
|---|-------------|-------|-----------|
| * | 45年4月1日     | ＝230名 | 6学級編成     |
| * | 45年5月1日     | ＝64名  | 3学級編成     |
| * | 7月1日        | ＝26名  |           |
| * | 1ヶ月に166名が転出 |       | * 1日平均約7名 |

- 2 その結果
  - \* 4月当初の学級編成、教科担任、校内の多くの組織を臨機応変に改  
変せざるを得なかった。実はそれはひと月と言うスパンではなく4月  
発足の翌日から「連続的に」と言うのが実態であった。

- 2-2 校内のあらゆる組織での人間関係が不安定に
  - 2-3 教科担任についても同様。教え方、学び方の流動化
  - 2-4 授業形態の変化、試行錯誤。確かな学力を保障することを最優先しながら
  - 2-5 実はさらに多くの校内生徒組織で構成員の欠落、移動が
- 3 その他の問題
- ① 教職員の途中異動
  - ② 清掃活動の負担増など

### 〈2〉 私たちはどう対応したか

- [1] 困難な状況の中で教育を守る（行政の意向との困難な調整）  
 ～ 何もかも、「できる限り昨年までと同じように」を基本に  
 ～ 彼らの次なる時間のために、学力の保障を
- 1 修学旅行
  - 2 給食を最後まで
  - 3 教師が年度途中で転出
  - 4 授業研究の推進
- [2] 教育条件整備機能の整理（閉校処理実務への対応）

### 〈3〉 振り返って

- 1 教師自身に何をもたらしたか
  - \* 貴重な経験だったから、人生が変えられた、人事異動で・・・
  - \*
- 2 子供たちの苦悩と困難のものは何か
  - \* あまりにも急激な
  - \* 集落の地勢的条件
- 3 行政との関係が
  - 日本の教育行政の根本的課題
- 4 生徒は、結果的にその後どう考えどう生きているか
  - ⇒ 生徒の手紙でその一端を
- 5 この試練に何か意義があったとするなら
  - \* この稀有な体験が、その後の長い人生の中で有意義に機能する（した）であろうことを願うばかり。  
 強靱な心身、柔軟性、協調性、広い視野、他人への思いやりなどなど・・・」
  - \*
  - \*

#### 4. 参加学生の感想（順不同）

- ・ 学校とは子どもの居場所であると思うが、それを急に失うのは、自分のよりどころがなくなるのと同じことであるから本当に辛いことだと感じました。それと同時に子どもはふるさとまでも失ってしまい、どこか違う土地に行っても帰ってこれないのはどんな気持ちなのかと思いました。新しい土地でそれぞれ生活が始まってしまうと連絡を取り合うことも減ってしまい、つながりが薄くなってしまうのは仕方がないけれど、もっと人びとの交流ができる場があればいいと感じました。
- ・ 紙の資料では閉山が生徒に与えた影響について、また子ども自身がその時どのような思いをもっていたのかを詳しく知ることができなかつたので、今回の講演はとても貴重なものでした。特に、閉山時に生徒に書かせた作文や生徒からもらった手紙の抜粋からは、生徒がその当時に受けた衝撃や感じた戸惑いを感じることができました。普通の転校は、自分がその地から離れても友だちや知り合いの消息を知ることができますが、閉山に伴う転校は誰がいつ転校するかもわからないため、友だちの連絡先も知らないまま、みんな離れ離れになってしまうという印象を受けました。
- ・ 炭砒が閉山になってから町から人が離れ、学校から人が減るのが、急激であり、建物や施設などがどんどん閉鎖されていく様子がよくわかった。その中で学校における教育や制度などを工夫したりしており、すごく興味深かった。
- ・ 炭砒閉山により、集落が崩壊し、わずか3か月の間に生徒数が二桁に激減したことは、校内にかなりの動揺をもたらしたことと思います。それでも生徒への影響をなるべく少なくしようと努力していた教員達の姿は、生徒の目にどう映っていたのでしょうか。子どもたちがいなくなった後も手紙を送り、精神的な面でサポートしていたという松実先生の取り組みは生徒たちの不安に満ちた心をなぐさめたことと思います。
- ・ 合宿前に見たビデオ（雄別閉山）で、子どもたちが「修学旅行が中止になった」と言っていたが、尺別中学では最後まであきらめなかったと聞き、驚いた。黒川にゴミが捨てられるという荒れた写真が、尺別が無くなることをよく物語っていたように思う。子どもたちからの手紙において、素直な心情がつづられており、大人の都合で居場所を奪われた子どもたちの寂しさ、不安がひしひしと伝わってきた。一枚一枚読んでみたいと思った。不安にさいなまれながらも新天地で頑張ってみようとする子どもたちのたくましさにも感動した。
- ・ 急激に人びとが転出していくことは、自然災害や戦争が原因だが、これらと同じくら



い閉山による人びとの転出があったのだと印象に残った。子どもたちの手紙には、子どもたちらしい素直な気もしが書かれていると思った。給食を最後まで提供したことに感動した。何人転出するかわからない状態で、量も予測しにくいのに、この時こそ（親も大変な時期）給食が必要だという考え方は非常にすばらしいと思った。

- ・ 学校がひとつ無くなるのがどれだけ子どもたちに影響を及ぼすかが切実に伝わってきました。雄別と同じように「炭砦のためにできた都市」であるため、閉山後の街の荒廃がいかに激しいものであったかと考えると悲痛な思いがします。尺別に関しては閉山後の街がどのように荒廃し、どのような人びとの移動や交流があったのかに興味を持ちました。解体するお金があったことも興味深いと思います。
- ・ 炭砦が閉山になることで起こった集団移住が、ひとつの集落に与えた影響とそれに対する人びとの悲しみが、生々しく語られていた。生徒がどんどん減っていく中でも、教員の水準を保とうとする教師たちの努力には並々ならぬものがあったのだろうと思う。本筋からはそれるが、松実先生が撮った写真がとてまかつこよく、美感があった。本人に聞いてみたところ、「特に写真が趣味であったということはなく、なんとなく撮っていただけ」と言われ、意外だった。
- ・ 今まで家族のように共に頑張ってきたにも関わらず、閉山したことによって短い間にこんなにもつながりが一気に絶たれてしまうということがショックだった。私でもこのように感じるのだから、尺別で過ごしてきた人びと、特に子どもたちにとっては相当な衝撃であったと思う。子どもにとって学校は自分の居場所であり、心の拠り所であると思うが、それがいつまで続くのか、友だちが少しずつ減っていく不安を感じつつ過ごすことは、かなり心苦しかったであろう。写真や松実先生の話聞く中で、学校から人が減っていく寂しさだけでなく、先生と生徒が一丸となって学校生活を守ろうとする意識が芽生えたり、行き届いた教育ができたりといった、悪いことだけではなかったことが分かった。子どもへの影響だけでなく、教師たちへの影響も大きかったと聞き、教師とはいえ、一人の人間で、家庭を持っていたら、尺別を出るという選択をするほかない方もたくさんいたのではないかと思ってしまった。閉山するということが、そこに住む人たちのそれからの人生をどう生きようかと考えるきっかけになったという点で、それを契機として積極的に考えることもできるのだと思った。
- ・ たくさんの写真を見せていただいて、閉山の影響の大きさというものを感じました。生徒の転出による人数の減り方や、様々な街の施設などがなくなっていったデータを見て、すたれ方がとても早いことにおどろきましたし、炭砦がその地域に住んでいる人たちにとってどれほどの存在であったのかを知りました。また、中学生が親の仕事

や今後の家族のあり方、友だち関係、自分のこれからの生活を考え悩み不安を抱えるというのは、精神的にもどれほどの負担だったのかを考えさせられました。今日いる友だちもいつどこに行ってしまうかわからない、教員もいなくなってしまう、生徒たちの校内組織がめまぐるしく変わっていく、という中学生の状況はなかなか想像できません。閉山と学校という初めての視点からお話を聞くことができました。

- ・ たくさんの写真を用意していただき、当時の様子をなんとなくですが、想像しながら講演を聞かせていただきました。閉山してからの急激な生徒数の減り方にはとても驚くとともに、当時いかに校内の状況が不安定だったかが伝わってきました。しかし、そのカオスな状況にも、当時の尺中の教師の方たちが、変わる事のない行き届いた教育で生徒に対応していて、素晴らしいなと純粋に感じました。生徒数が減っていくことを、悪いことだけではない、とプラスの思考に変えた点や不安や悲しみ、寂しさを抱える生徒たちへの心のケアなどのお話には大変感銘を受けました。こういった教師の方々の姿勢は、教育の鑑だと思いました。何事も苦悩は良い経験になるといったお言葉が胸に突き刺さりました。
- ・ 尺別が閉山してからの住民の様子、街の様子、子どもたちの様子を見せていただき、人びとの落胆の様子を様々な視点から感じる事ができた。資料を見ながら率直に、この閉山で最も苦勞した人は学校の教員であったのではと感じた。学校のお話を中心であったから、という可能性もあるが、仕事で子どもたちのケア、悲しむ様子を毎日みていたことを考えると、背負うものが多いように思う。また、教育委員会や地域の人とのパイプ役としてご苦勞があったと思う。教員の動きなどの視点から炭砒をみても興味深い内容になるのではないかと感じた。
- ・ 炭砒の閉山が人に与える影響、そして特に多感な子どもがどれだけのものを背負うことになったのかということを生々しく感じた講演でした。『黒川の絆』に詰まった切実なその思いを松実先生が伝えてくださることで、炭砒に留まらず日本の教育を考えるときに一石が投げられるのかもしれませんが。生徒をおそった同時多発的な困難、その状況は、戦争や自然災害にも比肩するといふところに炭砒社会の特殊性、ひいてはもろさを見た気がします。
- ・ 通常であれば、「このことが不安」というように具体的な要素がある。しかし「同時多発的」な不安が襲ってきたという話にあったように、尺別炭砒の閉山はあまりにも急で、先行きの見えない不安をもたらす出来事であったことを痛感しました。生徒数も、昭和45年4月には230人いたが、1か月間で166人も減ったということで、残された子どもたちは友人が次々となくなる状況で、精神的に追い込まれたであろうこと

が想像できました。スライドを見ながら、次々と生徒が減っていく様子は寂しく、子どもたちの作文にもそのことが表れているように思いました。人数が少ないと競争意識が薄れるだけでなく、向上意識も薄れがちだと思います。中学生という多感な時期にこのような出来事は個を埋めることにもつながりかねないと思いました。

- ・ 今まで勉強してきた中で一番、閉山のさみしさを感じた時間でした。「閉山」という出来事は、炭砒マンだけでなく、炭砒の地域全体を変えてしまうような大きな出来事であるのだと、あらためて実感できました。生徒が急に減っていく様子、建物が壊されていく様子を、写真やデータとともに解説してくださり、尺別の閉山の急激さを体感することができました。閉山の「いい面」をもとりあげていることに驚きました。急速な閉山に戸惑いつつも、現状を受け入れ、前向きに対処する姿勢があったのだろうと感じました。炭砒の人びとは団結していたからこそ、このような前向きな強さをもっていたのではないかと思います。
- ・ 主に閉山するときの様子と、中学校の生徒たちを取り巻く環境の二点についてお話を聞かせていただきましたが、協調性を育む場である学校の閉校によって、多感な生徒が心に負った精神的ダメージや、自らの将来の見通しが立たないまま新しい環境に飛び込まねばいけない厳しさについて、多くのことを学ばせていただくことができました。閉山時の太平洋炭砒でも、炭砒で働いていた方々は同じような気持ちを抱かれていたのかもしれないとも思いました。「黒川の絆」という学校新聞のようなものを先生が閉山後も手書きで生徒さんに送っていらっしゃる、途切れない絆があったことを感じたのが一番印象的でした。
- ・ 松実先生は、閉山後の動きを“戦争や自然災害にも比肩する急激な地域社会の崩壊・消滅”と表現されていたが、そのような状況で最後まで中学校が機能しようとしていたところがすごいと思った。お話からもうかがえたが、毎日変化する学校の状況に対して通常に近い形で運営するための努力は相当なものだったと思う。どこまで学校として、教員としての立場を貫くかということに対して葛藤があっただろうし、難しい問題だっただろう。生徒の悩み、さみしさ、つらさを文章から紹介していただいたが、通う生徒皆が同じような家庭環境をもち、同じような悲しさを抱えて、次々と仲間と別れることを迫られる中、家以外に集まることのできる学校が変わらず運営されていたことは、非常に救いであっただろうと思った。
- ・ 尺別の閉山によって、一気に人が流出していった過程を写真を見ながら確認できたので、より現実の話として聞くことができました。お話の中で「大災害や戦争並み」という言葉があり、いかに尺別炭砒によって社会が成り立っていたのかを感じました。

- ・炭砦が人びとの生活の中に入り込んでいるからこそ、閉山の影響が大きかったと考えさせられた。閉山に伴って、人びとが各地へ流出していく中で、残された者たちのさびしさがスライドショーを通じて、ひしひしと伝わってきた。細かな生活文化の変化については、実際にお話をお伺いすることでしか得られなかった情報であり、このような体験を大切にしたいと感じた。
- ・これまで三池と太平洋を中心に学習をすすめてきたため、尺別炭砦の閉山の話は新鮮であった。閉山により社会のつながりが絶たれ、人びとがその土地から離れていく、それがきわめて短い期間に行われたという話を聞きながら、昨年立ち寄った羽幌の炭砦展示を思い返していた。閉山はそこで働く人びとに限らず、その家族や集落に大打撃を与えること、さびれた羽幌の街並みとスライドの写真を想像しつつ理解することができた。また、松実先生自身が、当時の作文や手紙、写真を保存し、発信していることが印象的であった。閉山の影響を直接受け、目の当りにした方にお話を伺える機会は大変貴重なものであった。
- ・今まで数多くの炭砦に関する人のお話を聞いたが、さすが元教師ということもあり、お話の内容も、人柄もよく好印象だった。きっと先生の生徒は大変楽しい学校生活を送れたのではないかと感じた。先生のような教師が生徒のことを考えて、大切にしてくれる。増えてくれると日本の教育も充実すると思った。貴重な写真も印象的で、先生のような歴史を知り、語る者がいなくなっていくのは寂しい。
- ・貴重な写真を見たことで、現場の雰囲気がよく伝わってきた。自分が興味をもっていた「閉山が地域に与えた影響」を生徒数の減少から把握できた。一方で、写真から伝わる少人数になった生徒たちの寂しさを感じると同時に、お話いただいた内容から教師の大変さ、ぶつかった壁など、閉山の影響力、その後の地域復興にむけた取り組みを理解できたと思う。
- ・戦争など国全体が大変ななかで人びとがいなくなるのではなく、日本が好況ななかで、残されてしまう生徒たちの気持ちを考えると胸が痛くなった。みんなが愛着をもっていた黒川に、閉山後はゴミが捨てられてしまった写真を見て、アノミーとは言わないが、人びとをつないでいた、おさえていたものが無くなったときに、人間が見せる行動が恐ろしいと感じた。初期の段階で転校した生徒より、廃校間際で転校した生徒の方がつらかったと思う。残される方も悲しいが、残す方もとてもつらいと思う。係の人が足りない、清掃が辛い、など組織を維持できなくなり、崩れていくものの早さを感じた。限界集落などでも、尺中の教育モデルは適用されているのだろうか。

## 解題：「尺別炭砒の閉山と子どもたち」から学ぶこと

嶋崎尚子

### 1. 尺別炭砒閉山と中学校閉校

尺別炭砒は、1918年、釧路炭田西部「幽境の沢」尺別川沿いに開砒された。1928年からは雄別炭砒会社（1959年までは雄別炭砒鉄道会社）の一山となり、1942年には尺別専用鉄道も開業した。戦後最盛期には、最大生産量年間339,000トン（1966年）、従業員規模1,828人（1950年）に達したが、1960年代の合理化を経たのち、1970年2月27日に雄別三山（雄別・尺別・上茶路）の企業ぐるみ閉山によって52年の歴史を閉じた。閉山時の全従業員数は1,221人<sup>1</sup>、尺別地域人口は4,070人<sup>2</sup>であった。

閉山によって全従業員が解雇されたが、そのうち972人（80.3%）は、閉山半年後8月31日までに再就職を果たした。このうち労組組合員693人の再就職先地域をみると、「道内他産業」223人（32.2%）、「道内炭砒」117人（16.9%）、「道外」353人（50.9%）と、道内にとどまらず、全国へ移住していったことがわかる。道外の移動先は、18都府県にわたっており（山形1、福島1、群馬1、栃木2、茨城17、埼玉38、東京22、千葉83、神奈川104、静岡29、愛知28、三重5、富山2、滋賀1、大阪4、兵庫1、広島12、山口2）<sup>3</sup>、閉山から半年の間に、半数以上が新たな仕事を求めて家族とともに尺別を離れたのである。

尺別炭砒の開基によって形成された尺別地域は、閉山後一挙に崩壊し、半世紀を経た現在では、跡形もなく廃墟と化している。かつてここに、活気に満ちたヤマの生活や子どもたちの笑い声があったことは、もはや知る由もない。いったい4,000人を擁する町がわずか半年のうちに「崩壊」するとは、どのような事態だったのか。松実氏の表現によれば、「ほんの数カ月間に、3,000人から4,000人の集落が消えてしまったのです。それは“集落の消滅”とか“集落の壊滅”という言葉で表される」もので、「限界集落以上に厳しい」ものであったという。この急速な崩壊は「ヤマの生産活動が止まってひと月程たち、不安と沈滞の時期が過ぎると、嵐のような転出がはじまり、三月余りで人口も、従って生徒数も、十分の一以下になり、居住地域の集約と相まって、施設、住宅のとりこわしが急速に進む」という過程を経たという<sup>4</sup>。転出は一定速度で進んだのではなく、「不安と沈滞の時期」を経た後に、一気に始まった様子が見える。「戦争でもないのに、これほど急速に変貌、崩壊する地域社会が他にあるだろうか」というほどの激変だったのである。

<sup>1</sup> 尺別炭砒労働組合，1970，『労働組合解散記念誌 道標 一山峽の灯一』p.24-25.

<sup>2</sup> <http://haikyo.crap.jp/s/1307.html>

<sup>3</sup> 尺別炭砒労働組合，1970，『労働組合解散記念誌 道標 一山峽の灯一』p.23.

<sup>4</sup> 尺別炭砒中学校，1970，『地底の灯 尺別炭砒中学校廃校記念誌』p.8.

さて、この講演の舞台である音別町立尺別炭鉱中学校は、1947年に新制中学校として設立された。学校名に炭鉱会社名が入っていることからわかるように、同校は炭鉱の発展とともに歴史を刻み、1965年には13学級編成、生徒数524人にまで拡大した<sup>5</sup>。しかし、つづく石炭産業の衰退によって学校の命脈も絶たれることは必定であった。そして閉山半年後の7月20日に閉校したのである。生徒数は、閉山直後1970年3月に举行された最後の卒業式では100人以上を送り出していた。最終年度は(1970年4月)新入生を含め6学級、生徒230人で始まったが、7月1日にはわずか24人にまで減ってしまった(教職員18人)。まさに学校も急速に崩壊したのである。

## 2. 講演「尺別炭鉱の閉山と子どもたち」

本講演は、音別町立尺別炭鉱中学校の教頭としてこの事態に遭遇し、対応にあたった松実寛氏による記録・回顧である。氏はこのなかで、当時の記録と生徒たちの作文を材料に、「そのとき何が起こったのか」、「学校はどう対応したのか」、そして「子どもたちはそれをどう受け止めたのか」を丁寧に説明している。

第1部の閉山概要につづいて、第2部では、「閉山が生徒・教員に何をもたらしたのか」を考え、2点を指摘している。第1に、閉山は、生徒たちに「あまりにも幅広い、たくさんの深刻な問題を同時に抱え込」むことを強いたという。子どもたちは、炭鉱の閉山によって、親の失業と再就職、家族生活の変化、転居、転校、友だちとの別れといった具合に、生活環境の崩壊と再構築を余儀なくされた。講演中に紹介された「閉山というものは、私たちの故郷と母校をなくし、友達と別れさせ、大変さびしい思いをさせる憎いものです。しかし、これも一つの試練かもしれません。私はこのようなことには負けないで生きていかなければならないと思います」(3年女子)という作文はそれを端的に表現している。閉山は、尺別からの転出のみならず、故郷自体を喪失させるという残酷な経験を強いたのだ。彼らは、中学生というもつとも多感な時期にこの「あまりにも過酷な精神的な重み」を押し付けられたのである。同時に、彼らはそれを克服しようとする意欲をも持っていたのである。

第2に、閉山は、学校教育自体にもダメージを与えた。「明日、何人生徒が登校するかわからない」状況での学級運営の困難さは前例のないものであり、必然的に変則的な教育を強いた。尺別中学の教員たちは、「何もかも、できる限り昨年までと同じように」やること、「生徒たちの次なる時間のために学力を保障する」(きちんと高校に送り込む)ことの2点をスローガンにしたという。子どもたちにみじめな思いをさせずに、むしろそれをはねかえそうという志向であった。具体的には、少人数をいかした丁寧な教育の実現をめざし、研究会をもちながら対応したという。本講演では、教員たちが強い連帯感をもって臨んだ

<sup>5</sup> 尺別炭鉱中学校, 1970, 『地底の灯 尺別炭鉱中学校廃校記念誌』 p.2.

姿が再現されている。その象徴は、たった 16 人でも修学旅行を実施したこと（隣の雄別炭砦中学校では中止にした）、学校給食を最後まで継続したことであろう。さらには、古い校門を建て直して、新しい校門も作っている。「学校が無くなるからこそ」新しい校門を作って、そこに中学校があったことを残したいという考えがあったという。

そして、この講演は「この試練に何か意義があったとするなら」、「この非常に稀有な体験が、生徒たちのその後の長い人生のなかで有意義に機能する、あるいは機能したであろうことを願うばかり」との言葉で終わっている。

### 3. 解題

本講演は、1970 年 2 月から 7 月に尺別の地で起こった激変を、記録映画のようなリアリティをもって私たちに伝えてくれるものであった。尺別炭砦と地域社会ならびに子どもたちの経験は、多元的コンテクスト上に位置づけての説明が可能である。以下では、具体的に 4 点から整理し今後の研究課題としたい。

#### (1) 石炭産業の収束過程コンテクスト：「企業ぐるみ閉山」と地域の消滅

1955 年以降、2002 年に石炭政策が終了するまでに、日本国内では大小合わせて 928 炭鉱が閉山し、20 万人にのぼる炭鉱労働者が仕事を失った。その多くは、再就職とともに他地域へ移動し、家族がそれに伴ったのである<sup>6</sup>。しかしその様相は、50 年にわたる石炭産業の収束過程上の位置によって異なる。1970 年の尺別炭砦閉山は、前述のように雄別炭砦会社 3 山（雄別、尺別、上茶路）を一斉に閉じる「企業ぐるみ閉山」によるものであり、閉山特別交付金による支援を活用することに、そのねらいがあった<sup>7</sup>。

その背景には政策転換があった。エネルギー消費に占める石炭比率の急激な低下を受けて、1969 年からの第 4 次石炭政策は、それまでのスクラップ・アンド・ビルド政策を一転し、石炭生産量の計画的縮小へと舵を切ったのである。具体的には、石炭産業の国有化を断念し、私企業体制を前提とする石炭再建をすすめることとし、再建交付金をもってしても経営が立ち行かない企業に対しては、1969 年度・1970 年度に限り、企業ぐるみ閉山に対する「特別閉山交付金制度」が設けられた。「石炭企業は自らの責任において再建か閉山かの進退を決めるべき」とする政策転換であった<sup>8</sup>。これを受けて、なだれ的に閉山が発生した。1969 年度には 4 企業（杵島炭砦、明治鉱業、麻生産業、北星炭砦、合計生産量 1,862,094 トン）、1970 年度には 4 企業（雄別炭砦、夕張炭砦、飯野炭砦、羽幌炭砦、2,338,231

<sup>6</sup> 嶋崎尚子，2013，「石炭産業の収束過程における離職者支援」『日本労働研究雑誌』55(12):4-14.

<sup>7</sup> 三輪紀元，2014，「第四次石炭政策下での雄別炭砦株式会社の企業ぐるみ閉山」『エネルギー史研究』29:91-96.

<sup>8</sup> 嶋崎尚子，2010，「石炭産業の衰退と地域、労働者 — 常磐炭砦を事例としたライフコース研究とその社会的意義」2010 年度早稲田社会学会大会シンポジウム「旧産炭地の現在 — 常磐・空知・ウェールズの比較から —」報告.

トン)、合計 8 企業 (420 万トン) が「企業ぐるみ閉山」を決定したのである。

以上のコンテクストをふまえると、尺別炭砒閉山と離職者の再就職は、以下の特性を有すると考えられる。第 1 に、「企業ぐるみ閉山」においては、離職者への退職金等の支給、再就職支援等での優遇措置が図られ、それらは離職者の再就職を促進するものであった。第 2 に、尺別炭砒の地域的条件 (炭鉱開業によって開基された内陸地域) は、①閉山離職者に、地域移動を前提とする再就職、多くは石炭産業から他産業への転換を強制し、②閉山直後からの地域社会の崩壊は、失業手当 (黒手帳) 支給期間 (最大 3 年) 終了をまたずに早期の他出を強制するものであった。

こうした条件下では、閉山離職者は、性急な進路選択 (再就職と移動) を強いられ、その結果、中長期的にみると不安定なキャリア展開とキャリア再修正の確率が高くなる。さらに、都市への移動によって都市的ライフスタイルへの適応・生活構造の再構築が強いられたと予測できる。そしてむしろ、そこには尺別炭砒での離職者・家族の階層的背景、家族のライフステージ、社会関係資本も関連している。

## (2) 尺別炭砒・地域の歴史的コンテクスト：社会的平等志向の醸成とその継承

他方で、尺別炭砒ならびに尺別地域の歴史的・文化的コンテクストへの着目も重要である。管見の限り、尺別炭砒・尺別地域は、固有の強い「ヤマの絆」を有している。そこには、山峡のヤマであったという地理的条件と、尺別炭砒労働組合のたどった経路、具体的には昭和 37 年・38 年の「尺別事件」による混乱とそこからの再起、が影響していると考えられる。

尺別固有の「ヤマの絆」は、閉山後の 2 つの事象に見いだせる。第 1 は、閉山後の労働組合幹部による離職者訪問である。労働組合解散記念誌『道標 一山峡の灯一』には、昭和 45 年 4 月 26 日の労働組合解散後に組合幹部たちが、6 月から 12 日間をかけて道内再就職者・道外再就職者を訪問した経緯が詳細に記載されている。そのねらいは、再就職者への激励、就職後の現況の調査、手続関係の問題点、その他相談にあったという<sup>9</sup>。

第 2 は、現在も存続している「東京尺別会」の活動である。1971 年に結成された東京尺別会は、尺別中学校の同窓会機能も果たしている組織である。現在の会員数は 235 名、毎年 5 月に会合を現在まで継続して開催しており、他に類をみない組織である。ここでは、尺別の「ヤマの絆」が現在まで持続し、さらに次世代へと継承されている。

また、尺別地域の特性は、尺別炭砒中学校の教育目標にも色濃く反映されている。すなわち、社会的平等志向の醸成である。尺別中学校の教育目標は、「平和を守り、真実を貫く、尺中教育」とある。松実氏によると、このスローガンの背景には、炭鉱社会の身分制、すなわち職員、砒員、下請会社従業員からなる階層構造がある。尺別炭砒中学校は、そうし

<sup>9</sup> 尺別炭砒労働組合, 1970, 『労働組合解散記念誌 道標 一山峡の灯一』 p.42.



た炭鉱社会を前提にした学校であるがゆえに、学校内には、父親や家族の炭鉱内での身分差別を持ち込まないことを徹底し、教員と生徒たちの間に連帯感と満足があったという。

### (3) ライフコース上のタイミング：「炭鉱の子どもたち」の閉山経験

さらに、「炭鉱と子どもたち」というテーマは、石炭産業の全体像を理解する上できわめて重要なテーマである。実際、これまでも多くの文学・芸術・映画作品のモチーフとなってきた。たとえば、写真集『筑豊のこどもたち』（土門拳、1960年）、日記『にあんちゃん』（安本末子、1958年）、夕張新鉱のガス突出事故を題材にした『その日父は帰らなかった』（夕張新鉱災害作文集編集委員会、1982年）、最近では、映画『フラガール』（李相日、2006）も炭鉱子女の苦闘を描いている。また、北海道赤平の豊里炭鉱小学校6年生の佐藤栄作首相への手紙（1966年8月1日）は広く知られている。「私たちの学校は今毎日のように新聞やテレビで報道されている豊里炭鉱の子どもたちがかよっている小学校です。教室ではくわしくはわからないのですが、毎日のように心配して話合っています。・・・中略・・・兄や姉やわたしたちが勉強したなつかしい小学校もなくなって、私の生まれた町がすっかりかわってしまうでしょう。悲しいことがたくさんおきそうです。豊里の炭鉱がつぶれないように父に（ママ）仕事がこのまま続けられるようにお願いします」。この手紙に佐藤首相は便箋10枚にわたる返信を送った<sup>10</sup>が、1967年3月31日に豊里炭鉱は閉山となった。

また、学校教育現場でも産炭地域の教育問題は、重視されてきた。具体的には、「広く不利な立場で成長せざるを得ない子どもたちは、そこで展開される教育のあり方を考える上でも」、「炭鉱社会の子どもたちが抱える不幸は、大人たちの不幸が投影されたものであり、大人たちの幸福が実現されなければ、子どもたちの幸福もないといった考え方が提示されている」<sup>11</sup>という。

そうしたなかで本講演からは、中学生というもっとも多感な時期に閉山に遭遇することの衝撃を理解することができる。講演中も引用されている作文には、中学生各人の受け止め方が率直に記されている。閉山決定に衝撃を受け、その後の親の再就職、転居、自らの転校が決定し転出していく過程で、彼らは、自分のおかれた環境の苛酷さを悲嘆し、不運への不平をもちつつも、それを徐々に現実のことと理解している。そして、新たな環境が具体化するなかで、友人との別れを悲しみ、移転先での適応に不安を抱き、それを克服し、挑戦する意気込みや希望が芽生えていく過程が示される。中学生という人生上のタイミング固有の特性であり強さでもある。ここで取り上げた状況、すなわち子どもたちが自分たちの力ではどうすることもできない事情で、学校を離れ、親しくしていた教師や友だちと

<sup>10</sup> 労働省職業安定局失業対策部，1971，『炭鉱離職者対策十年史』日刊労働通信社，301-307。

<sup>11</sup> 新藤慶，2015，「産炭地における子どもの姿と教育実践 —1950年代～1960年代前半の研究をもとにして—」『群馬大学教育実践研究』32:123-134。

別れて、新たな生活を始めなければならない状況は、現代の学校統廃合や被災地からの避難等の場合にも、共通するものである。

#### (4) 教員による記録とその保存：アーカイビングとしての価値

最後に、本講演はアーカイビングの視点から整理することも可能である。炭鉱閉山前後の過程については、多様な領域で種々の記録が集積され、保管されている。そのいずれも、炭鉱閉山という稀有な出来事が、労働者・その家族、地域社会におよぼした影響を知る上で重要であることはいままでのない。

そのなかで本講演の資料は、以下の2点でとりわけ価値がある。第1に、閉山によって廃校した中学校教頭による記録である点をあげたい。松実氏は、尺別炭砒の閉山決定という事態に遭遇した際に、「これは、たいへんなことになった」と認識し、「可能なかぎり記録しよう」と考えたという。そして、実際に、学校廃校という何ら指針のない業務をいかに担い、学校現場で何が起こったのかを詳細に記録した。そこには、教育行政への強い批判も含まれている。さらに、氏は激務に追われるなか寸暇を惜しんで、「地域を回って、地域がどう変わってきたかをみて回り記録し」、多くの写真を撮影している。この姿勢は、単なる好奇心ではなく、氏の教育者としての強い信念「教育は地域とともにある」に基づくものである。それゆえ、松実氏が収集した記録は、廃校過程の記録として学校教育史研究での活用、さらには「教員人生にとってもっともドラマチックであり、印象深い経験」「奇妙な体験」であったとの述懐のとおり、教員個人史研究での活用も可能である。

第2の価値は、当時の中学生の作文と手紙が残されている点である。そこには松実氏の社会情勢に関する精確な敏感さと、生徒たちの作文を重視するという当時の教育スタンスが反映されている。閉山前から生徒たちは折に触れて作文を書いており、それゆえ、閉山決定直後から数回にわたって書かれた作文には、彼らの率直な気持ちが記されている。また松実氏は、尺別を巣立っていく生徒たちに移動先から手紙を書かせていた。彼らからの手紙をもとに、全国に散らばった生徒たちに「黒川の絆」通信を3号作成し送ったという。「黒川の絆」は、新天地で心細い想いをしている生徒たちを勇気づけたことだろう。

最後に、尺別炭砒閉山から40年を経ているにもかかわらず、われわれは松実氏の講演ならびに記録資料と出会うことができた。松実氏が数多くの転任・転居のなかでそれらを保管なさっていたこと、松実氏とわれわれが出会えたことの幸運、その機会を与えてくれた釧路市立博物館学芸員石川氏に感謝したい。



尺別炭砒の閉山と子どもたち  
一元尺別炭砒中学校教頭 松実寛氏による講演の記録―

(JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーvol.7)



発行日：2016年1月15日



編集：嶋崎尚子・笠原良太

発行者：産炭地研究会 (JAFCOF)

<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/>



本報告書は、2012～2014年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)『石炭産業終息期における炭鉱と地域社会：“最後のヤマ”のライフコース』(課題番号・24530674 研究代表者・嶋崎尚子)ならびに2014～2018年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A)『東アジア産炭地の再定義：産業収束過程の比較社会学による資源創造』(課題番号・26245059 研究代表者・中澤秀雄)による研究成果の一部である。